

「基地共存」の演出に憤怒

「沖縄／草の声・根の意志」

目取真 俊著

社会構造の中で差別する者が被差別の側に組み込まれた者からの問題提起をうけたとき、しばしば息苦しい圧迫感に襲われる。そんなとき、問いの重さに耐え自分なりに行動に移すより、むしろ多くは「そちらの置かれている立場はわかるがこちらにも事情があり、お互い様だ」と開き直すことを選んでいる。一九九九年から二〇〇〇年にかけて沖縄の地元紙を中心に書かれたエッセイと掌編小説がおさめられたこの書の根底で問われていることはただ一つのように思える。それは今現在、沖縄の負わされている課題は「障害者」「性」「ハンセン病」差別などヤマトである我々も常に身近で見えてきた問題に対し、行われてきた政治政策と根は一つであるということだ。

それは、沖縄サミットに象徴される「飴と鞭」「よき隣人政策」が物語る。サミットだけで八百十五億、北部振興策に十年で一十億という巨額の金がばらまかれ、普天間基地の『県内移設』を含めた、あたかも沖縄県人すべてが望んでいるかのような基地との『共存』の演出である。さらにマスコミ、映画、ドラマ等でヤマトンチュー（日本人）好みのウチナンチュー（沖縄人）像がつくられ、双方ともそれによりかかった表面だけの「よき隣人」関係によって、基地問題の本質がなし崩しになっていくことに著者は憤怒する。論の端々からは「本土―沖縄」〈差別―被差別〉の二元論を超える新しい視座の獲得と実践こそ急務であることがひしひしと伝わってくる。

その中で来年一月に行われる名護市長選候補者を、広く外部から公募し、その能力、資質を判断した上で会員たちによってうちだそうという、『わったー（私たち）市長を選ぼう会』の試みを興味深く読んだ。基地受け入れ拒否を貫徹できる者なら島の内外を問わず、という発想である。これはおそらく島であるゆえに、そこに固執する意識を利用してきた者にとり脅威となるはずだ。島を超え、よりしなやかな「島」であり続けようとする沖縄。そこから、いつまでも開き直り、行動を起こさぬ側たちすべてへの宣言と告発の書である。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

沖縄／草の声・根の意志
目取真 俊

世織書房・2200円